

平成18年
(2006)



広報きかい

特集号

発行/鹿児島県喜界町役場 ㊟891-6292 電話0997-65-1111 編集/企画課 印刷/南日本新聞開発センター

町村合併50周年記念

▼農道を走る耕耘機



▲紬工場で機を織る老婦人

▶「広報きかい」の前身「町政喜界だより」



喜界町が誕生した昭和三十一年九月十日の翌年、現在の「広報きかい」の初版に当たる「町政喜界だより」が発刊された。当時の喜界町長・豊岡老氏（故）は「昨年九月十日、『旧喜界、早町』両町村が合併して、新しい喜界町として発足してから、はや九ヶ月が経過しております。その間、町長選挙、議会議員選挙、行政機構の改革、予算編成がつきつぎ行われ一応民主自治行政のルールがしかれ、一六〇〇〇町民の御協力と期待のうちに新町育成への努力が続けられてきました。しかしながら『道は、遠く無限である』。合併した趣旨に照らして、その効果をすぐに期待することは早計であり、むしろ今後によこたわる困難な諸問題をいかに解決し、いかに建設するということが肝要であります」と挨拶を述べている。（「広報きかい」縮刷版より抜粋）

町村合併50周年に寄せて



喜界町議会議長 乾 和夫



喜界町長 加藤啓雄

先日の記念シンポジウムで講師の久岡学氏から、「未来は足元にある。喜界町は資源・人材ともに揃っている。自立自興の精神を忘れず夢と希望を持って進め」と励まされ、参加者一同感銘を受けました。女子中学生からは「明るい未来をつくり出すのは、私たち自身です」とのメッセージがあり、若い労働組合員からは「住民サービスの充実には、まず役場職員の質の向上を」との心強い発言もありました。また、県の福祉事務所長からは「喜界町は、生活保護世帯の割合が少ない、税の滞納も少ない、介護保険料は群島一安い、すばらしい町民性です。でも、あまり頑張りすぎないで」とお褒めをいただきました。総務省の新しい財政指標「公債比率」で喜界町は一一・一％という県内第四位の数字でした。先達の足跡の確かさと現町長の施政方針の正しさを国が証明してみせています。私たち議会人もまた行政当局とともに、全力で喜界町の「今」を支えていこう、と決意を新たにしています。ともにがんばりましょう。

町村合併五十周年を迎え、一言ごあいさつを申し上げます。皆様方におかれましては、平素より町政各般にわたってご協力を賜り、衷心より感謝申し上げます。昭和三十一年九月十日に喜界町、早町村が合併し、新しい喜界町が誕生いたしました。今年は、その合併から五十年を迎える節目の年でございます。また、今年には、町村合併五十周年と併せ、二十数年前から建設基金を創設して進めてきた待望の喜界町新庁舎とコミュニティセンターが完成いたしました。五月二日には、多くのご来賓を迎え、落成式を挙行いたしましたところでございます。広大な畑地、海原を越えた向こうに大島本島を一望できる景勝の地に、近代的な庁舎が完成いたしました。古来、島に生え親しまれてきた樹木を植栽した、「町民憩いの場「町民の森」に囲まれた庁舎で業務できますことに、関係各位、町民の皆様方に心から感謝し、職員共々、さらなる行政サービスの向上を図ってまいります。

このような素晴らしい日を迎えることができましたのも、半世紀にわたって幾多の変遷を乗り越えてこられた先人達、そしてなにより町民各位が共に力を合わせ、「新生・喜界町」の限らない発展に邁進してきた結果であり、各人のご努力と各般へのご協力・ご指導・ご支援があつてこそと強く感じているところでございます。

町村合併50周年記念シンポジウム

“喜界島の未来”をパネル討議

～未来へ 50年後の喜界町～

「未来へ50年後の喜界町」をテーマに、「町村合併50周年記念シンポジウム」が九月十日、町コミュニティセンター多目的ホールで開かれた。

南海日々新聞社編集局整理部副部長の久岡学氏の、「50年後の喜界町ー未来は足元にある」と題する基調講演・町内小・中学校六校の児童生徒代表の「未来へのメッセージ」朗読、パネル討議などがあった。「本町の将来への展望」と題し、島の現状と課題などについて約四時間にわたって熱心にディスカッションが展開され、会場の町民からもまるごと喜界島を捉えた提言が出された。

喜界町のまちづくりの主役の皆さんにご登場いただき、パネル討議を進めていきたいと思えます。



加藤町長

行政課題

これから単独でやっていく喜界島においては、まず最初に考えなければいけないのは、財政問題だと常々思っております。

▽地方交付税の現状

新聞、テレビなどメディアで報道されている通り、国の財政再建と絡んで、本町の命の綱と言われる地方交付税が毎年一億円以上減らされてきている。こういう自治体でどうやれば健全財政を確保して将来につないでいけるのかとい

うことを常に考えおります。

▽施設職員の現状

「一島一町」でありますので、都市並みにいろんな施設を持たなければならぬ。診療所、と畜場、火葬場、老人ホームとかクリーンセンターというように、行政部局外の施設が沢山あり、それぞれ職員を配置しなければならぬという大きな悩みがあります。

町政懇談会などでよく住民

から「職員はうっさそうあらんな、はんさな」と言われますが、実は、類似団体の他の町村より町長部局の職員の数は少ないのであります。しかし、先程言ったようにいろんな施設があるために全体としては職員を抱えなければならぬ。これが行政の大きな



問題じゃないかと思っております。

▽合併効果

市町村合併の時に一番考えたのは、喜界島に合併効果はあるのかということ。ほとんどないわけです。

財政を大きくまとめれば国

が面倒を見てやるというから皆さん(他の市町村)は、やっているわけでありまして、本町にとっては合併効果はないような気がしたわけでございます。幸いに、町民の皆様方、特に旧早町地区の皆さんから「やれるところまでやってみる」というような熱烈な

る激励がございました、本町は合併しないということも早々に決めました。それによって、法定協議会とか、合併に関する会合とか、負担金とか無駄をはぶきました。奄美群島のどの町村よりも真っ先に、住民投票も行わずに町民の大きな英断を頂いたことにより、「わーちゃ島の人はすごいな」と、私もそうですし他の方々もそういう評価してくださいます。

将来展望

考えているのは、明るい未来の喜界町をどうやって構築していくかということです。▽まずは足元から『先祖からの伝承』

現在、喜界には島の先祖が大事に育ててきた、過酷な自然条件の中で生き残ってきた、無農薬でできるゴマやそら豆、また、各家々の庭先には喜界ミカンはじめ、いろんな雑柑類があります。そら豆などは今まで誰も触れませんでした。そういったものがあります。

この何れをとっても、大学の先生などに言わせると素晴らしい健康食品だということ、分析結果もすべて出ています。これらを本町の特産品

喜界島の未来

へのメッセージ



これからの喜界島

上嘉鉄小六年 作 田 いづみ

少しずつ変わり始めている喜界島。ぴかぴかに輝く新しい役場、一つもなかった信号機ができたこと、新しいレストランなど、新しい暮らしが始まっていくようで、胸がわくわくしてきます。ところが、建物だけは増えていくのに、島の人口は減っていくばかりです。

最近、喜界島の高校生が、鹿児島や東京の大学などに行って、島を離れていくことを聞きました。喜界島にいても、働く場所がないからなのでしょう。そういう私も、きつと高校を卒業するときには、きつと島を離れることを選ぶでしょう。安心して暮らせる喜界島にするために、私がこの島に望むことは二つです。

まず一つ目は、自然を残すということです。建物が増えると、その分、空がせまくなります。青々としたさとうきび畑や美しい花、そして蝶らの姿も減ってしまうことでしょう。一度失われた自然は取り戻すことは難しいと言われていきます。この喜界島のすばらしい自然は、わたしたちの宝です。いつまでも守ってほしいと思います。

二つ目は、若い人たちの働く場を作ってほしいということです。島に暮らしたいという思いがあっても、収入がなければ生活していくことができません。

わたしたち人間が生活していくためには、豊かさや便利さが欠かせません。その一方、今の喜界島が持つ、自然の美しさを失ってはいけません。自然と人間が共に幸せになれる島、それが未来の喜界島であってほしいと願っています。



未来の喜界島について

早町小五年 萩原 昭真



ほくは喜界が大好きです。だからこそ未来の喜界島に今よりよくなつてほしいことがたくさんあります。

一つ目は、排気ガスを使うものを減らすことです。理由は排気ガスを減らせば、地球温暖化を止めることになるし、人にもいいからです。

二つめは、ごみのポイ捨てです。遊んでいると、空き缶や、たばこのすいがらがたくさん落ちていて、びっくりします。ごみを捨てたりすると、生き物にもたくさんのがをさせます。以前テレビで海鳥や川辺にいる鳥の頭や体にダーツで使うような、はりがささっていたのを見て「ごみを捨てたらいろんなところでめいわくがかかるぞ」と思いました。

三つ目は、さとうきびでもっと有名にすることです。そうすれば喜界島が日本全国で有名になってそれで観光客も増えるかもしれないからです。喜界島の黒さとうは、最高です。もっともっとたくさんの方に食べてもらいたいです。

四つ目は自然です。喜界島には、美しい自然と海があります。ほくは、ひこうきから見る喜界島が大好きです。緑

の島とすきとおった青い海。いつか喜界島が世界自然遺産にえらばれるように、喜界町全体で取り組んでいけたらいいなと思っています。

五つ目は、いろんなことの後つぎです。さとうきびは、ほとんどお年寄りがしているのでその後つぎの人がいなくならないようにする事が大切だと思います。

喜界島のよさを失わないようにそして、さらによくなつていくようにみんなで努力していけたらいいなと思っています。

喜界大地の恵みを未来へ

荒木小五年 豊島 琴乃



ど、この島に対して三つ思うことがあります。

一つ目は、喜界島と奄美大島を結ぶ大きな橋ができるといいなということです。

わたしはよく、奄美大島へ遊びに行きます。奄美大島に行くためには、朝の四時に起きて船に乗って行かないといけないのでつらいです。橋があれば朝早くから起きなくてもいいので、とても便利だと思います。橋ができるとお年寄りの人もバスやタクシーを使うとすぐに行けるので、

喜界島のみんなが喜ぶと思います。わたしは、喜界島と奄美大島を結ぶ橋ができるといいなと思っています。

二つめは、ゴミのポイ捨てをやめてほしいということです。

わたしたち荒木小学校の子供会では、ボランティアとして、毎月第三日曜日に、朝八時から美化活動をしています。しかし、毎月していてもなかなかゴミの量は、減ってはいきません。私は、このままだと喜界島がごみの島となつてしまふと思っています。わたしは、大好きな喜界島が、

ごみの島になつてしまふのは、とてもいやです。喜界島みんな一人一人が、ごみのポイすてに気を付けると喜界島はもっときれいな島になる

と 생각합니다。私には、海もきれいなこの喜界島を、世界で一番美しい島にしたいと思っています。

みなさんも、ごみのポイ捨てをやめて自然いっぱい喜界島にしていきましょう。

観光から人口増加を目指して

第二中二年 伊集院 恵



喜界島のこれからも続くだろうと思う問題は、人口減少だと思っています。私が一番身近で感じている事でもありません。なぜなら、学校の生徒数が年々減ってきているからです。昔は、何百人もの生徒が通っていたこの第二中学校も今では、二十人ほどのとても小さな学校になりました。人数が少ないとできない事が多

く、お父さんの話では、昔は「もっと自然がいっぱいだった」ということです。今以上に緑が多く、鳥の鳴き声がいっぱい聞こえていたそうです。わたしは、いろいろな所で鳥の鳴き声を聞いてみたい

です。わたしは、みんながこの喜界島の自然を守っていききたいです。

私は、海もきれいなこの喜界島を、世界で一番美しい島にしたいと思っています。

みなさんも、ごみのポイ捨てをやめて自然いっぱい喜界島にしていきましょう。

く、お父さんの話では、昔は「もっと自然がいっぱいだった」ということです。今以上に緑が多く、鳥の鳴き声がいっぱい聞こえていたそうです。わたしは、いろいろな所で鳥の鳴き声を聞いてみたい

くあります。

喜界島の人口が増えないのは、なぜなのか考えてみると二つの理由が考えつきました。一つ目は、観光場所があまり知られていないことです。二つめは、空き家がないことです。引越して来たいとは思っても家がないと住めません。特に観光場所は、喜界島に旅行へ来てくれた人へ

アピールできる必要要素です。だから、もっと積極的に高めていくべきだと思います。例えばわたしたしなら、オオゴマダラなどのちょうが飛んでいる季節に、百之台や喜界島の史跡などをまわるウォー

できることから始めよう

早町中二年 真井大樹



島独特の文化である方言、二十メートル下の魚まで見渡せ、いろいろな生き物が生きていて、泳ぐと海のような広

クラリーのようなイベントがあったら、うれしいと思います。そして、観光とは少し異なりますが歩道に年中咲いているような花を植えれば、島の印象も更に明るくなるような気がします。このような工夫をすれば、島外から遊びにきたり移住してくる人も増え、人口もどんどん増えていくのではないかと思います。

喜界島の人口を増加させて、わたしは学校でたくさん友達を作り、いろいろなことにチャレンジしてみたいです。そして、未来の喜界町が活気あるものであるようにしていきたいと思っています。

気持ちになれるような青い海。そしておいしい空気、サトウキビ、ゴマがたくさん実る豊かな土壌……。また、地域の小さな子どもたちから高齢者までが楽しいひと時を共有する十五夜行事など、私の周りには自慢できる喜界島がたくさんあります。大好きな場所があふれています。

そんな大好きな喜界島で過ごす中で感じている不安が二つあります。

それは地域の行事に参加したときのことです。喜界島でしか聞くことのできない言葉、即ち方言を使っている人が、「高齢者」の方ばかりだったことです。喜界島の人々の心を通わせてきた、心の言葉である方言が若い世代では全く使われていないということ、未来において、互いをいたわりあう言葉が消えてしま

うことになりません。一つの方言から心を学ぶ機会もなくなるのではないのでしょうか。とても寂しいことです。二つ目に朝は小鳥のさえずり、十一月まで響く元気なセミの声、伊勢エビ、ガラなど豊かな海の恵みにあふれた喜界島の生態系が壊されていることです。私たちが住みやすい環境を求めため、観光客を呼び込むための観光化などから自然が壊されています。危惧しているこの点を、回避し未来へ喜界島のよさを残そうと行動するのは今です。

まず、積極的に高齢者と交流し、生活の中から生まれた方言を使いこなしていくこと。そして、小さなことですが、自然の中に人工ゴミを増やさない活動をゴミの分別、物を大切に使うなど、できる

ことから始めましょう。私の自慢の喜界島を未来に残し、

未来の喜界島

第一中三年 成田愛香

未来の喜界島は、いったいどうなっているのでしょうか。私の未来の喜界島は、「自然がたくさんあって、みんなの笑顔があふれている喜界島」です。

最近、日本各地では自然破壊がおこっています。でも、私たちは自然のおかげで生きているのに自然を大切にしてい

ません。なので自然があるこの喜界島を大切に未来の喜界島でもたくさん自然を残したいと思います。そして二つ目、みんなの笑顔があふれている喜界島では、喜界島は都会とちがってたくさんいい所があります。もちろん悪い所もあります。喜界島のいいところの中の一つは、



未来の人たちにも喜界島を愛してもらうために……。

地域が一体となって行事・イベントを完成させるところです。これは、喜界島だからこそ、喜界島しかできないことだと私は、思います。だから、私の未来の喜界島でもみんな協力しあって笑顔が栄える喜界島であってほしいと思います。

私達が大人になったらこの喜界島を出ていく人がいるかもしれないし、新しい時代がきていろいろな物が発達するかもしれない。けれど、私は私の故郷「喜界島のよい所」を守っていき、そして悪いところはどんどん直していつて喜界島カラー「緑」自然を大切に喜界島らしい喜界島を私たちの手で作り上げていきたいと思

います。未来の喜界島、どんな、喜界島になるかは私達にも分かりません。未来の喜界島、いえ、未来は私達にたくされていきます。そのことを心にかけていと受けとめ、たくさんのけいけん和努力をしながら未来へ歩んでいきたいです。

昭和30年代



昭和34年2月15日発行／「町政喜界だより」第2号
見出し：「明けゆく郷土の港」

台風や冬の海の時化など自然的・地理的悪条件を解消するため総事業費1億円(当時)を投入し整備が進められた。「将来、本港(早町港)を中心に南方漁業への躍進が大きく期待されると共に本町の産業、文化は一段と飛躍するだろう」と述べられている。



▲人の往来で活気づく湾港

画像と広報紙で

たどる50年の足跡



昭和32年9月発行／「町政喜界だより」第4号

見出し：「新生活運動と農業革命～叫ばれている合理的営農」
「ラジオ・電気という科学文明は喜界島創生以来、はじめて喜界島民に与えられた歴史的出来事である。その技術は、人間の創意工夫によって構築された。農業においても干ばつ暴風を防ぐことは困難であるが対応した設備、農法を科学的に研究し、緊急に農業革命を断行することが、真の意味で初めて私たちの生活は安定するのでは」と呼び掛けている。



▲空から見た操業前の生和糖業



昭和32年発行／「町政喜界だより」第6号
見出し：「新町の難題～赤字解消、ようやく見通づく」

当時の予算規模は約七千八百万円程度。支出が最も多いのは、奄美群島復興事業費38.27%、次に役場費が33.07%、続いて教育費が12.24%となっている。

財政事情公表によると「道路橋梁、港湾などに巨額な財源が必要。本町の財政は財源にうまく合わせて予算に計上しなければならず従って現在の貧しい財源ではどうしても十分な施策は出来ない」とされている。



▲塩道側から貨物船が入港する早町港

昭和40年代



▲麦打ちは、農作業の中でも特に重労働であった



昭和40年6月15日発行／「広報きかい」第54号

見出し：「生和・大和製糖工場合併」

「さとうきびの生産増に対する処理能力や糖業をとりまく内外の情勢悪化、糖価の大暴落などによって大混乱」。課題も多く含まれていたが「対策として生和・大和合併がなされた」と記載されている。



▲赤連の松村商店から湾方向を望む



昭和42年2月15日発行／「広報きかい」第66号

見出し：「今後は高校全入運動へ～喜界高校商業科2学級を増設」

競争率1.2倍のカベを破りなんとか高校入試の競争率を緩和しようと高校所在地の市町村長や議長は学級増問題で陳情を行う。結果、喜界高校も商業科2学級増設され普通科2、商業科3となった。

「これまで鹿児島県の照国高校などに相当数の子弟が進学しており、家庭で月に一万八千円送金して、百人進学していたとすれば年間二千六百六十万円もの大金が送金されることになる。今後はこれらの学生が地元の高校に進学することによって父兄の負担は大幅に軽減される」と述べられている。

▶町民待望の客船「あまみ丸」就航祝賀会（湾港棧橋）



昭和46年1月1日発行／「広報きかい」第90号

見出し：「喜界町で初の知事と語る会～船、キビ、鮎、専門医等身近な問題で質疑」

現職の知事が訪れて、知事と語る会が10月22日、第一中学校体育館で開かれ、町民およそ五百人と親しく語る。会は「発展のための基盤整備・産業開発・社会問題・しまくるみで流出防止～サトウキビは大島の農業の軸」と大きく四つの項目に意見が集中。知事は「キビは大島の農業の軸。最近労力の不足から反当収量が落ちていることを心配している」などと語り、「県も土地改良・農道・町道の整備を協力していく。沖縄の復帰ということも影響してくるが、省力化・品種改良などに積極的に取り組んで反収をあげてほしい」と激励した。

昭和50年代



昭和50年11月号発行／「広報きかい」第133号
見出し：「きび価引き上げ（生産者大会）」
「今期キビ価格引き上げ要求の第3次陳情団の一行81人が、10月18日午前7時半出港のあまみ丸で東京晴海ふ頭へ向けて出発した」と記載されている。



昭和50年12月発行／「広報きかい」第134号
見出し：「初の婦人スポーツ大会～綱引き競争など盛況」
島内の婦人会千人が町総合グラウンドに集い、第1回体力づくり婦人スポーツ、レクリエーション大会があった。お手玉競争や年代別リレーなどで熱戦が繰り広げられ、開催目的の健康増進や全婦人の親睦が図られた。大会は「婦人達の楽しそうな姿が印象的」とある。



昭和51年12月発行／「広報きかい」第144号
見出し：「合併20周年の記念式典を開催～功労者13人を表彰」
式典は台風17号の襲来で当初予定9月10日開催から延期され、12月10日、中央公民館で開催。式典には町議会議員や区長、町民など200人が参加。「感謝状や表彰状の贈呈が行われ、最後に町のプラスバンドなどの演奏が披露され、盛況のうちに終えた」とある。繁多忠利町長（故）は「和親協力して、豊かで楽しい日々を送る姿こそもっとも美しい」として、「過ぎし20年を思い起こし、一島一町の良さを生かし、何事にも力を合わせて喜界島の発展に邁進していきたい」と挨拶を述べている。



▲昭和50年代の正月風景



▶興南丸お別れ航海



◀当時、近年にない記録的な豪雨に見舞われた湾発電所一帯



昭和53年5月発行／「広報きかい」第160号
見出し：「にぎわう魚のセリ市」
「漁業協同組合の魚市場では、毎日朝早くから水揚げされた魚のセリ市でにぎわう。セリ場には多種多様な魚が並べられて取引され、今の季節ではサワラがもっとも多い。昨年1月から12月までの水揚げ量は約13万8千kgで毎年漁獲高も伸びている。最近、漁業無線、製氷所などが設置されて漁船も板付船から3～5トンの小型動力船にかわりつつある」と漁業振興の成果が述べられている。

昭和60年代



▲湾の岩田商店から赤連方向を望む



▲地球人宣言を乗せてメキシコから来航したマリガランテ号



▲海の玄関・湾港と空の玄関・喜界空港の滑走路



昭和60年4月発行／「広報きかい」第218号

見出し：「知識の公園完成～長島氏感謝の念で寄贈」

本町羽里出身者の長島公佑氏（故）の篤志によって建設された喜界町図書館の落成式が同年3月14日、盛大に行われた。

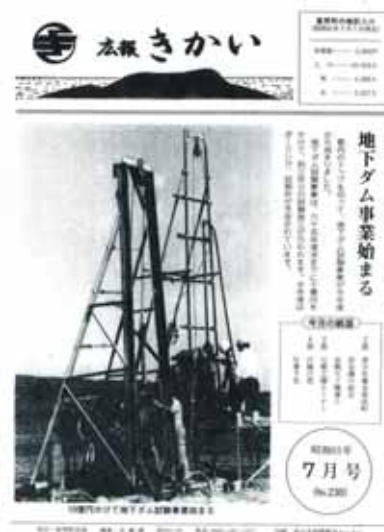
氏は「わたしを育ててくれた郷土喜界島に感謝の気持ちを表す方法として図書館の建設に着手した。町の教育文化の発展のために役立ててください」とあいさつを述べている。



昭和60年8月発行／「広報きかい」第220号

見出し：「名誉町民に繁多氏～職責を全うし、多くの業績を残す」

5期20年間にわたり、町長として町勢発展に尽力された繁多忠利氏(故) の名誉町民称号授与式及び顕彰祝賀会が、同年8月8日、自然休養村管理センターで官公庁の代表や議会議員など350人が出席して盛大に行われた。



昭和61年7月発行／「広報きかい」第230号
見出し：「地下ダム事業始まる」
「郡内のトップを切って地下ダム試験事業が始まる」と記載されている。

そして平成へ



平成7年11月発行／「広報きかい」第341号
見出し：「震度5 喜界を襲う～喜界沖地震」
震度5の強震が10月18・19の両日、喜界島を襲った。防災無線による非避難の呼び掛けで高台に避難する町民、混乱する情報などパニック状態が続いた。

被害は港湾の亀裂3カ所、山崩れによる道路の通行止め、石垣の崩れ91カ所などが確認されており、また、民宿・タクシー会社などは災害報道関係者の来島で逆に潤うところもだが、観光客や展示会、宴会などの相次ぐキャンセルにホテル業界は、「一日も早い終息を」との述べている。

役場の対応は防災無線の的確な放送で住民からは「気象庁の判断をうのみにせず、独自の情報を流し、敏しうな決断は、役場のイメージを高めた」と述べられ、混乱の中での冷静な対応を評価。



平成11年11月発行／「広報きかい」第389号
見出し：「地下ダム止水壁が完成～農業の多様化に期待が高まる」

平成4年に着工した国営地下ダム事業の止水壁が平成11年10月7日に完成。町内外から関係者が集い締切式、祝賀会が盛大に行われた。

挨拶に立った野村良二町長（故）は「農業立島を掲げながら、地勢や自然の厳しい条件は、将来の展望を拓く。地下に水を貯めるといふ夢のような施設の完成が現実となり感慨無量。恒常的な水不足が解消され、多様な農業の展開が可能」と感激の面もちで喜びを述べている。



▲城久半田遺跡



▶ゴマの花



平成15年6月発行／「広報きかい」第432号
見出し：「なぜ今、市町村合併か」

「町独自に作成された財政シミュレーションなどでは『来年度には基金（貯金）貯金も底をつく』。予想をはるかに上回るペースで財政は悪化、平成22年度には累積赤字は50億円に達する」と解説。住民、議員、職員ともに『合併反対の声は多い』。しかし、住民説明会では、独自の財政シミュレーションの結果に将来を不安視する声も以前より多く聞かれた。

第2回住民意識調査集計結果では「合併の不必要が76.1%、必要が19.4%、残りが回答なし」で依然、合併反対の意向が強く見受けられる」と合併の是非を含めた協議が深まる。



▶花良治ミカン

平成18年6月発行／「広報きかい」第468号

見出し：「合併50周年と新庁舎落成を祝う～児童・生徒や郷友会もメッセージ」
町民、来賓、町関係者など合わせて約300人が5月2日、町コミュニティセンターに集い、記念式典、祝賀会が盛大に行われた。

各小・中学校の代表3人による「喜界町の未来へのメッセージ」朗読や感謝状、表彰状が寄贈品の贈り主や町政功労者などに贈呈された。

加藤啓雄町長は「この厳しい時代に町民が心と力を合わせ、これだけの大きな事業を成し得た誇りと自信を持って、これからの町勢発展のために、一層の努力を注いでいく」と決意を述べている。





「島への提言」を募ります

喜界町では、町民はもちろん島外に住む出身者の皆様と共に、「豊かで活力に満ちた島づくり」に積極的に取り組んでいくため、町づくりに対する意見・提言を募集しています。

お寄せいただいたご意見・ご提言は、今後の町政に反映させるよう努めてまいります。

なお、この意見・提言は今後の喜界島はどうあるべきかという羅針盤であるため、非難・中傷的な投稿は、ご遠慮ください。

投稿の方法

一、手紙か電子メール

一、住所（島外者は出身集落名）、氏名、年齢、性別、職業名、役職を明記

一、提出先 喜界町役場企画課

① 住所 〒891 (6292) 鹿児島県大島郡喜界町湾1746

② 電子メールアドレス koho@town.kikai.lg.jp